



「触れてみるパソコン移動講座」より  
於：大雄中学校

総合教育センター  
プラネタリウム室での授業風景より  
増田東小学校



# 総合教育センターだより

## ◇ — も く じ — ◇

- ・プラネタリウム室の授業風景から…………… 1
- ・移動講座から…………… 1
- ・総合教育センターは2年目を迎えて…………… 2
- ・縦の糸・横の糸…………… 3
- ・平成8年度第11回秋田県教育研究発表会案内…………… 4
- ・親子夏休み星の観察の報告…………… 4

平成8年12月13日発行

### 秋田県総合教育センター

〒010-01 南秋田郡天王町天王字追分西29番地の76

TEL 0188 (73) 7200 (代表)

0188 (73) 7206 (すこやか電話相談)

FAX 0188 (73) 7201

パソコン通信 0188 (73) 7207 (代表)

学習指導案  
レファレンスサービス 0188 (73) 7210 (FAX)

# 総合教育センターは2年目を迎えて

次長 桧森治樹



男鹿半島と連なる砂州一帯に発達した町、人口の増加を続ける天王町。先人の遺徳を偲ぶ緑濃い黒松の中に、ひときわ白い建物が映えている。新築移転して2年目の当センターは、秋田市に県教育研究所としてスタート以来、通算42年目を迎えている。

「究める」「高める」「広める」「応える」そして「開かれた」センターを願いとして再出発したものであるが、2年目の様子を少し報告してみたい。

## 講座の運営

講座の変化を講座数からみると、平成6年度109、7年度146と総数で約40%の増加であった。増加のほとんどは、個人希望によるC講座63から100への変化である。今年度は、総数140と抑えながら、C講座の傾向は踏襲されている。それは、個々のニーズに応じるという「選択の時代」への一つの流れと考えてもよい。そのため、一講座の内容にも多様性を求め、小・中・高校・特殊教育学校いずれの校種も参加できる間口の広さが模索されている。

義務研修で悉皆講座のA講座、推薦講座のB講座の両者と、個々の教師の様々な研修ニーズを満足させるC講座の創造とその調和は、「…行方に難し」に類するだけに、指導主事の様々な創意と連携・協力がことさら大切になっている。

悉皆研修の重視と希望研修の充実は、講座編成上の基本であるが、県内各学校の意欲的な受講こそ教育センターへの何よりの励ましである。

講座における教師個々への在り方は、学校での一人一人への配慮に連動するものであり、同時にそれは当センターの姿勢として大切な要件でもある。

## 情報収集アクセス

平成7年6月1日から、パソコン通信「教育ネット Akita」が開始されて以来、学校からのアクセスの多さは予想以上であり、月平均2,000件以上にもなる。データベースが不調の際は問い合わせも多く、教育情報への期待の大きさが伝わってくる。

センターは、教育諸情報、フォーラム、掲示板、メール、衛星雲画像、電子顕微鏡写真、さらに、FAXと両方で提供している学習指導案などについて24時間を通じてアクセスを受け止めている。

日夜を問わない先生方の姿を想像しながら、同時に、センターと学校がこれまで以上に強く結び付き始めていることも感じている。

## 教育相談

センターの相談機能も、常に開かれた状態にあって各学校あるいは家庭からの相談が相次いでいる。

その件数は少ないに越したことはないが、そんな視点で相談件数を見ると、平成7年度は、心身障害及び

一般教育相談併せて新規156件、前年度からの継続115件で、面接総回数は1,974件と相当な数にのぼる。

うち、一般教育相談の面接回数は、平成5年度以降1,539件、1,182件、そして1,555件という経過をたどる。

これらの数は、学校、教育相談機関、家庭、地域社会すべてが絡む論議の高まりを求めているように思う。

## 施設設備の利用

センターには、最新の設備が設置されていることから、個人、団体を問わず自主研修の場としての使用申し込みも多い。講座との重複を避けて可能な限り応じており、夏季休業中には電子顕微鏡活用の先生やグループの姿が見られる。また、プラネタリウムを教室とする小学生、研究発表会や電子顕微鏡活用による研究や学習を進める小・中・高校生など、児童生徒の姿も多く目にするセンターである。また、センター以外の教育関係機関や研究会組織が施設設備を利用する機会も多く、昨年度133件、延べ9,400名以上もの利用がある。

センターの多様な機能が浮き彫りになっているといえる。

## 「研究発表会」の構想

平成9年2月13・14日の両日、恒例の「教育研究発表会」を予定している。県教委、当センター関係をはじめ、各学校及び個人の研究の発表総数は、昨年に迫るものがあるかと予想されている。

また、記念講演は、筑波大学名誉教授 前文教大学学長 永岡 順氏から講師の快諾を得ており、企画展は、パソコンの教育利用に関連する最新情報の展示(インターネット等)が考えられている。

この第11回研究発表会が、県内各校種の研究情報交換並びに諸研究推進への弾みの機会として、また、これからの教育を展望する貴重な機会を提供できるよう企画担当が鋭意取り組んでいるところである。

教育センターは、現職研修に深くかかわる“ひとつの場”である。そして、その在り方は、教師自身の課題と深くかかわるものとする。異例の短期間でまとめを急いでいる教育課程審議会の動向とともに、全県教師のセンターへの期待の把握が3年目を迎えるセンターに不可欠であると考えている。

# 縦の糸・横の糸

—異校種合同研修講座の充実を期して—

教職研修部長 安井 信雄



～はじめに～

教員に求められる資質・能力は、一般的には「豊かな人間性と専門的な知識・技術や幅広い教養を基盤とする実践的な指導力である（中教審答申）」と言われている。したがって、研修における優先課題は、それぞれの段階における教育を直接担う教員としての実践的指導力の向上を図っていくことであると言える。しかし、同時に、学校教育全体を貫く教育課程の理念や教育改革の基調、国や県のレベルでの重点課題にかかわる問題について、校種を越えて共通理解を深めていくこともまた重要である。教科指導や生徒指導、進路指導などにおける校種間の連携強化の重要性はこれまでしばしば指摘されてきたが、「個性化教育の推進」や、「いじめ・登校拒否問題への対応」などの今日的諸課題を考えると、その重要性はより一層高まってきている。したがって、これからの教職員研修は、これまで以上に校種を越えて、一人一人の児童生徒の自己実現を連帯して援助しているのだという意識の高揚を図るという視座に立って進められる必要がある。換言すれば、教職員研修全体のパラダイムは、太い縦糸に支えられ、各段階にふさわしい多様な横糸によって彩られ充実していくものであると言えよう。

このことを念頭に置いて、当総合教育センターでは、基本研修講座を編成するに当たり、可能な限り異校種間の交流を図る場の確保に努めてきている。そこで、年次研修における取組みの一部を紹介したいと思う。

## 1 中学校・高等学校教職経験者（5年経過）研修講座

「学習指導と評価の在り方」を中心として、今年度の中学校第Ⅱ期と高校第Ⅲ期を合同研修とした。講座のねらいを「6年間を見通した教科指導の在り方」とし、富山大学の山極隆教授による「学習指導と評価」と題する基調講話と教科ごとの中・高合同の協議を中心に編成した。

山極教授は、これからの学校教育の役割を考える基本視座、学校教育改善・充実の課題、個性を生かす教育の充実、指導方法の工夫・改善、新しい学力観に立つ評価の観点などに触れながら、学習指導方法の改善と教師の意識改革の必要性を熱く説いてくださった。お話の中には、「社会の変化に伴い上級学校が子供を選ぶ時代から、子供が個性的な学校を選ぶ時代が変わろうとしている。そのような時代になると、現在のように上級学校への入試の存在がある意味で子供の学習への動機付けになっていた時代を脱して、入試の存在が必ずしも学習の動機付けにならず、まさに日頃の教師による授業の在り方、進め方が子供の学びの動機付けになる時代になり、入試を隠

れ蓑にすることは許されない時代になる。」という指摘があり、日常の授業の見直しを強く促して頂いた。

合同研究協議に関する受講者の感想は、「子供の学習は中学を卒業させたら終わりではなく、ずっと続いていくものであることを改めて感じ、責任の重さを再認識した。」「高校の先生から学習指導上の悩みなどを聞くことができ、中学校でつけなければならない力や、どこに重点を置いて指導したらよいかの分かり、大変参考になった。」（以上中学校）「一人一人の生徒が辿ってきた、中学校⇒高校という流れが考えていた以上に重要であるのに、今まであまり考えないできた自分を発見でき、よい機会になった。」「教科指導の他に、HR指導、進路指導を含めた中・高合同講座の拡充を期待したい。」（以上高校）など、設定の趣旨を積極的に受け止める内容のものが多かった。

## 2 全校種教職経験者（10年経過）研修講座

10年研の第Ⅱ期では、「ふるさと教育のねらいを体感するとともに、講座を通して異校種間の交流促進を図る」ことを目標にした「選択研修」と、「人間としての在り方生き方を目指した教育活動」をどう展開すればよいかをテーマにした「シンポジウム」とを設定した。

選択研修は、ふるさとの空、ふるさを歌う、郷土料理、郷土工芸、郷土の文学、郷土の鳥、郷土の文化交流など、15の分科会で編成し、受講者は希望の会場で校種を越えて和気藹々たる雰囲気の中で研修することができた。

シンポジウムでは受講者の中から小・中・高各1名のシンポジストを依頼し、標題についての取組みの現状と課題について発表してもらい、フロアからも発言して頂いた。小学校からは、多様な体験活動の場の設定、一人一人のよさや可能性を引き出すこと、家庭や地域社会との連携の大事さなどについての発言があった。また、中学校からは、生徒が自己実現に向かって努力できる状況を準備することの大事さと、そのために人間的な親密な触れ合いや助け合いを大切にする雰囲気作りに努めているとの説明があった。高校からは、総合学科の特色である幅広い選択、小人数授業、単位制、進路指導の充実が在り方生き方教育に繋がっているという報告があった。

受講者からの感想は5年研受講者のそれと同じ趣旨のものであったが、紙面の関係で割愛させて頂きたい。

～おわりに～

異校種間の交流を進め、連携強化を図る取組みが各学校においても一層広まっていくことを期待したい。

## 秋田県総合教育センター主催

# 平成8年度 第11回 秋田県教育研究発表会

期日 平成9年2月13日(木)～14日(金)  
会場 秋田県総合教育センター

### 記念講演

## 演題 「教育改革の方向とこれからの学校教育」

筑波大名誉教授 永岡 順氏  
前文教大学 学長



### 日程

		10:00	11:00	11:10	12:30	13:45	15:55
13日 (木)	受	教育研究奨励賞授賞式 教育研究発表会開会式 各研修部研究概要説明			県総合教育センター 各研修部 研究発表	交流の広場 昼食 休憩	分野別研究発表 (分科会)
	付						
		9:30	12:15	13:30	15:00		
14日 (金)	受	分野別研究発表 (分科会)			昼食 休憩	記念講演	
	付						

## 親子夏休み星の観察の報告

夏休み中の8月16日(金)、19日(月)の両日、『親子夏休み星の観察教室』を開催しました。

開催の初日の空は、1等星が雲の切れ目から時折顔を出す程度でしたが、講師の先生方は、一人でも多く星に親しむことができるように、タイミングよく天体望遠鏡のレンズを星



に向けてくれました。野外での観察と同時に、映写会やプラネタリウム室での番組放映も行いました。雲が少なくなった午後8時過ぎには天体ドームからも星がよく見え、時を忘れて星のロマンに酔いしれていました。

開催2日目は好天に恵まれ、260人を越える方々の参加が得られました。開始間際に、講師の先生方が、沈みかけた月に天体望遠鏡の焦点を合わせてくださったので、参加者は、月面の大きな凹凸に歓声をあげていました。天体ドームでは、木星や夏の夜空を彩る恒星の見事な輝きを観察することができました。プラネタリウムも定員をはるかに越えるほどの盛況ぶり、子供たちの歓声がドームに響き渡っていました。

2日間で408名の参加者を迎え、大盛況の余韻を残しつつ終わることができました。多数の参加に厚く感謝を申し上げます。来年度も魅力ある内容で実施いたしますのでご期待ください。